

Ezequiel, González-Ocantos, 2020, “Designing Qualitative Research Projects: Notes on Theory Building”, Case Selection and Field Research, in Luigi, Curini and Robert, Franzese (eds.), *The Sage Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations*, Los Angeles, SAGE, pp. 104-120.

Ezequiel, González-Ocantos(2020)「定性的研究プロジェクトの設計：理論構築のためのノート」事例選択とフィールド調査」

➤ 紹介文

本稿は、政治学・国際関係論に関する定性的・定量的方法論を幅広くカバーした最新の著作、“SAGE Handbook of Research Methods in Political Science and International Relations”に収められた論文である。本稿では特に、定性的研究における特定事例の適切な理解、過程追跡の遂行、説明の妥当性を得るために必要な研究設計について、理論・モデル設定の重要性という観点から検討を行っている。

➤ 概要

- 政治学や国際関係論における定性的研究は、以下のような問いを研究課題とする。
 - ・ 「なぜ 1914 年に第一次世界大戦が勃発したのか?」、「なぜ諸国家は国際刑事裁判所を創設したのか?」、「なぜメキシコは 70 年にわたる一党支配の後、2000 年に民主化されたのか?」、「なぜイギリス、ドイツ、スウェーデンは異なるタイプの福祉国家を形成したのか?」、「アルゼンチンやペルーでは民主化後に独裁者が訴追・処罰された一方で、なぜブラジルで処罰されなかったのか?」
 - ・ このように、政治学や国際関係論における定性的研究は、一事例並びに少数事例間の出来事・変化に焦点を当てる。
- 特定事例の適切な理解、過程追跡の遂行、説明の妥当性を得るために、どのように研究プロジェクトを設計すればよいのか。本稿はこのような問いに対して、研究を始めるには、原因から結果に至るまでの因果経路に関する理論並びにモデルの設定が不可欠であることを主張する。
 - ・ 本稿は、上述の特定の結果をもたらす因果経路に関する理論やモデルを設定する際に、次の 3 つの変数(parameters)に基づく行動の「場」の、様式化された記述(stylized description)を行うことを提案する。すなわち、(1)アクターの選好、行動

の論理、資源、(2)アクターが行動する空間、(3)上述したアクターと空間の相互作用である。

- ・ こうした「場」の重要性を踏まえ、以下ではまず、因果経路に関する「モデル」を設定することの含意について検討する。次に、そうした「モデル」が先行研究の知見に対する代替説明の構築に果たす役割を示す。最後に、「モデル」が事例選択戦略に与える影響について述べる。

➤ 「モデル」の設定：因果経路を把握することの含意

- ・ 研究者は研究を行う前に、フローチャートのような手法（矢印などで因果関係を図式化する手法）を用いて、因果関係の経路を「描く」ことが推奨される。
- ・ このような因果関係の経路に着目した手法として、過程追跡(Process Tracing)が存在する。過程追跡は以下の3つの本質的な特徴を有している。
 - ・ 第一に、過程追跡の目的とは仮説を評価することにある。具体的には、特定事例において、因果経路の構成要素の有無に関する仮説を評価する（先行研究もしくは理論によって提示された因果経路の評価）。
 - ・ 第二に、因果の経路を探求することに主眼が置かれている。
 - ・ 第三に、効果的な過程追跡(effective process tracing)には、優れた記述が不可欠になる。研究者は時間的順序や、理論が前提とする因果経路に配慮しながら説得力のある物語を組み立てる必要がある。
- ・ 重要な点は、研究とは「理論」や「モデル」を抜きにして始めることができない、ということにある。すなわち、因果経路・メカニズムに関する前提知識／地図（独立変数と結果の関連性を説明しうる事象やアクターの行動等）がなければ、どのようなエビデンスを探すべきか、またそのエビデンスの説明的価値を他の説明と比較して評価することは不可能になる。
 - ・ 「理論」とは、研究者が研究対象とする特定の事例内の出来事を平易に説明したもの、あるいは、特定の事例において何が生じているか、研究者が考えていることを表現したものと言える。
 - ・ 「理論化 (Theorizing)」とは、特定の結果が生み出される場の境界と特徴を特定する過程を意味する。
 - ・ 「モデル」とは、特定の現象を理解するために何が適切で、何が適切でないかを

示す枠組みを意味する。本稿では、上述のモデルを、行動の「場(field)」の様式化された記述として捉えたい。

◇ 「場(field)」とは、P. Bourdieu (Bourdieu and Wacquant, 1992: 94-110) によって用いられた概念である。Bourdieu は「場」を、芸術的分野、学問的分野、政治的分野において歴史を通じて出現する、アクターによる行動の空間を指す概念として用いた。

◇ 例えば芸術分野に関する「場」とは、美術館、オークションハウス、財団、アカデミー、アートスタジオなどを意味する。また「場」を構成する空間には、芸術家、評論家、アートコレクター、美術館のキュレーターなど、さまざまなアクターが存在する。アクターは「場」において各者の立場にたちながら、自身の有する資源（芸術家の絵を描く能力、財団の資金力、批評家の権威等）を提供し、芸術的成功に関するゲームに対してさまざまな役割を果たす。

- 政治的現象を秩序立てて記述するためには、場の 3 つの重要なパラメーターを特定することが重要になる。
 - ・ 第一に、アクターとその選好、行動の論理、資源を特定する必要がある。
 - ・ 第二に、これらのアクターが行動する空間を明確に概念化することが必要になる。
 - ・ 第三に、アクター間の相互作用・交流が、他のアクターや因果的エネルギーの流れ(the flow of causal energy)にどのように影響するかについての説明が必要になる。
- 以上の 3 つのパラメーター（行為者、空間、相互作用）を踏まえることで、検討に先立って提示されている因果的要因が、なぜ・どのように結果へと至るのかを説明するための基礎が形成される。

➤ 「モデル」の設定と資料収集(111-113)

- 上述のモデル、すなわち場という文脈から対象を考察することは、フィールドワーク・資料収集を行う際のロードマップを提供し、研究者が観測可能な含意を導き出すことを補助する。
- フィールドワーク・資料収集は、因果の連鎖によって指定された因果ステップの順序に従って行われるべきである。これには以下の理由がある。

- ・ 第一に、因果連鎖のすべてのステップが適切に文書化されたときにのみ、研究者の提示したモデルは検証されうる (George and Bennett, 2005: 207; Beach and Pedersen, 2013: 39; Waldner, 2014: 132; González- Ocantos and LaPorte, forthcoming)。研究者の目標が、特定の結果について論理的あるいは十分な説明を提供することである限り、モデル内のいくつかのステップを文書化できないことは、因果関係の連鎖を再考する必要を含意している。
- ・ 第二に、因果連鎖に指定された因果ステップに基づくデータ収集のアプローチは、フィールドワーク・資料収集の生産性を向上させうる。因果連鎖の各ステップは、基本的にアクターが他のアクターに何かを働きかけることに基づいている。そのため、まずその過程を引き起こしたアクターやその行動に関する情報を得れば、その他の事象についてどのような情報を探せばいいのかわかるようになる。
 - ◇ 例えば著者の場合、特定事例における教育的介入の情報を得ることで、関連する司法関係者を特定し、その経験や介入が制度形成に与えた影響についてフィールドでの質問能力を向上させることができた。
- ・ 第三に、観察可能な含意を導き出すことを容易にすることである。研究者は、フィールドワーク・資料収集を行う前に、理論やモデルに適合するようなエビデンスの体系的なリストを作成する必要がある。「ある仮定が正しいのであれば、X、Y、Zを観察する必要がある」という因果連鎖の各段階における観測可能な含意を列挙することで、研究タスクがより管理しやすくなる。

➤ 代替説明の識別に対する含意(113-115)

- ・ 研究プロジェクトの開始時にモデルを設定することで、競合する説明と研究者自身が提示する代替説明との異同の識別が容易になる。過程追跡の方法論者が「代替説明のために広く網を張る」と助言しているように、データの質とはエビデンスの量ではなく、ある観察されたデータが研究者自身の提示した説明を支持する程度並びに競合説明への不適合の程度によって決まるため、モデルの設定は定性的研究の成否にとって極めて重要になる。
- ・ しかし、「広い網」を張ることは非常に困難な作業となる。ここで明らかな資源は、当該トピックに関する先行研究である。研究者は、研究プロジェクトを設計する際、常に先行研究を参照しながら、既存の記述に対する自身のオリジナリティと重要性を示そうとする。

➤ 事例選択への含意(114-116)

- 定性的研究者は、個人的なこだわりや言語能力など、方法論以外の理由で事例を選択することが多い。また歴史的な意義があることや、あまり研究されていない事例に惹かれることもある。しかし、方法論的な基準に基づき事例を選択することは非常に重要である。
- 以下では、モデルを場の定型的な記述として考えるという本稿の視点が、因果関係が生じる事例（ポジティブケース）と因果関係が生じない事例（ネガティブケース）についての、事例選択戦略に役立つことを指摘したい。
 - ポジティブケース、つまり、結果が生じる事例については、場の境界とその内部の論理を特定することで、一事例並びに少数事例間で変化を促す文脈上の要因を見分けることができる。事例における変化のバリエーションの存在は、ある文脈が他の議論に適用できることや、ある文脈の特徴が必ずしも結果を説明するものではないことを示すために必要とされる。
 - ☆ 例えば、著者が検討したアルゼンチンとペルーという2つのポジティブな事例では、選挙で選出された議員の移行期正義に対する選考と、政治的環境が持つ被害者集団に対する敵対度の強弱について、両事例間において結果のばらつきが見られた。こうした敵対度の強弱が確認される文脈において、結果までの過程がどのように展開されるかを分析することで、教育的介入の実施と成功が、政治家層（the political class）の訴追に対する寛容さや軍の強さに依存しないことを示すことができた。
 - この一方で、ネガティブケース、つまり結果が生じない事例を選択することもできる。結果志向の定性的研究では、ポジティブケースにおける中断のない因果関係の構築によって推論力が得られるとともに、ネガティブケースとの比較を行うことで、反事実的推論を補助する経験則が提供される。
 - ☆ 著者の研究では、主にメキシコをネガティブケースとして取り上げた。メキシコでは、組織的な人権運動があるにもかかわらず、司法関係者がそれとは対照的な法的嗜好を有しており、前者の主張を法・制度的に推進することができなかった。メキシコでは、2000年以降、「汚い戦争」に関する事件を調査するために特別検察官が任命され、元政治家や軍人を相手に多くの訴訟が展開された。その結果、人権団体と司法関係者の間に持続的な交流の場が生まれたものの、その後のフィールドワークで

わかったことは、人権団体は専門的な弁護団に投資するのではなく、政党との連携や動員力といった非生産的な資源の蓄積に重点を置いていたことであった。人権団体は、法分野を「動かす」論理を理解することができず、制度変化の戦術を設計し展開することができなかつたのである。研究では、人権団体の活動家は司法関係者との出会いにおいて、制度を変革するための新しい法的知識や法学的基準を普及させることができず、これが因果の流れを中断させるに至ったと指摘した。

➤ **結論 (116-117)**

- 本稿は、著者自身の定性的研究の経験を振り返りながら、特に過程追跡を用いて政治的現象を説明する研究や少数事例の比較研究に対して、研究プロジェクトの設計に関するいくつかの指摘を行った。
- 重要な点は、研究設計の最初から理論やモデルの位置付けに注意を払うことであり、それらは資料収集、代替的説明の確立や判別、事例選択に影響を与えるということである。
- また理論やモデルの重要性を指摘したことで、定性的研究は単に事例に埋没して検討を行うだけではなく、先行研究や仮説、観察可能な含意に研究プロセスが規律される事を示唆した。理論・モデル設定は困難な作業のように思えるが、場とその3つの構成要素（アクター、行動空間、両者の相互作用）から考えることで、容易にモデル設定を行うことができると指摘した。